

音

の

ま

に

ま

に

Music Life

TWELVE

音楽とは、性別関係なくまだまだ人々が活躍できる余地が残された、発展の可能性を秘めたジャンルのひとつだ。今回は男女の社会的ポジションをテーマにして作られた映画をいくつかご紹介。木村奈保子さんが自身の経験も織り交ぜながら名作たちを解説し、紹介していく。



①



②

① 「愛のイェントル」

監督:バーブラ・ストライサンド
出演:バーブラ・ストライサンド、
マンディ・パティンキン ほか
販売元:ワーナー・ホーム・ビデオ
DVD 発売日:2009年2月3日

② 「恋におちたシェイクスピア」

監督:ジョン・マッデン
出演:グウィネス・パルトロー、
ジョセフ・ファインズ ほか
販売元:ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
DVD 発売日:2004年9月29日

最近では日本でも女性指揮者が誕生しているが、これからもどんどん増えてくるのだろうか？

さて、指揮者のような目立つポジションでは、女性の衣装も気になるところ。マニッシュなタイプの人は、メンズタキシード系でもカッコいいが、そうでないタイプの人は体型をより悪く見せる可能性があるメンズスーツを選ぶのは、ちょっと厳しい。私も、精神は完璧マニッシュでも、あこがれのメンズスーツを着こなすことができない体型のまま、人生を終えそだ。

ルックスのイメージを考えて指揮をするわけではないと思うが、メキシコの女性指揮者、アランドラ・デ・ラ・バラ氏みたいに、気合が入った指揮である上に、衣装も男物ではなく、かといって女性を強調したドレスでもない、実にフェミニンなデザインのブラックスーツが素敵なお人もいます。また、ソプラノ歌手のバーバラ・ハンニガン氏のタイトドレスによる指揮姿は、これまたセクシーだが女優ばりの美貌だからこそそのスタイリングだろう。

女性が指揮者であるとき、男性演奏者がどういう気分になるのかは人にもよるであろうが、違和感を持つ人もまだこの時代にいるのだろうか？

かつて私もテレビに出演するのはよかったのだが、ディレクターとして指示する側に立つと、カメラマンやスタッフからずいぶん反感を持たれてやりにくかった思い出が多々ある。「もしかして、女だから舐めているの？」と啖呵を切ることもしばしば。

もちろん、映画監督にほとんど女性がいないのも、“社会では男は女の指示に従いたくない”という歴史に関わる問題から。わずかな例外の中で、チャンスを得た女性が先頭を切ってきたのだ。

さて、私が生涯でもっとも共感したヒロイン映画の1本として、「愛のイェントル」(1983年アメリカ)がある。

これは20世紀初め、ポーランドで生きたユダヤ人女性の話。そのころユダヤ社会では学問は男性だけのものであり、女性は台所へはいるべきと選択が決定されていた時代。

ヒロインは、ユダヤの哲学を教える先生(バーブラ・ストライサンド氏=ラビの娘)なのだが、まわりの男子たちと同じように学ぶことが許されない。なぜ女に生まれたというだけで、やりたいことも考えたいことも許されないのだろうか？と日々疑問を持ちつつ、ある日突然父親の死を迎える。愛する者を失ったヒロインは男装をし、女であることを偽って男子校に潜りこむのである。

実在したユダヤ人女性の話を映画化する際に、監督のバーブラ・ストライサンド氏自らが企画をもってまわったが、なかなかOKをもらえなかったいわくつきの作品。

男装のバーブラ氏は、黒づくめのパンツ・ファッションで、男子ばかりの教室に違和感なく存在する。あのトレードマークの大きな鼻と厚めの唇が目立つものの、華奢すぎない顔の作りが意外と男装にマッチしていたのが印象的だ。

胸やヒップの丸みを隠すのに苦労はあっただろうが、知的でスピード感のある話し方や低音のトーンも男性的で違和感がない。ヒロインは、クラストップの成績を誇る男子と親友になり、男装の面倒も忘れるほどに哲学論争を楽しむ。だが、彼の恋人に出会ったとき、複雑な気持ちになる。恋人はロングヘアーをなびかせ、料理も上手く、フェミニンなドレス姿が似合う可憐な美女。

男装したヒロインの親友への気持ちが、友情から愛に変わるとき、性を偽るファッションは変わるのか？ファッションにより、性のアイデンティティが問われ、衣装が女性の生き方を左右す



3



4

3
「モロッコ」

監督:ジョセフ・フォン・スタンバーグ
出演:マレーネ・ディートリッヒ、ゲイリー・クーパー ほか
販売元:ファースト・トレーディング
DVD発売日:2011年2月15日

4
「クリスチナ女王」

監督:ルーベン・マムーリアン
出演:グレタ・ガルボ、ジョン・ギルバート ほか
販売元:ワーナー・ホーム・ビデオ
DVD発売日:2005年10月7日

るものとして描かれる。ヒロインは、好きな男性の願望に応えるよりも、男装の生き方を選び、愛を棒に振る道を選ぶのがポイント。ハッピーエンドでも悲劇でもない、前向きな女性の自立の始まりなのだ。

ちなみに恋人役の美女は、エイミー・アーヴィング氏で、ユダヤ系の女優。のちに映画監督のスティーブン・スピルバーグ氏と結婚し、その後の離婚で莫大な慰謝料を得ている。

同じく、女性が演劇に登場するのを禁止されていた時代、16世紀のロンドンで男装をして役にありつくのが、映画「恋におちたシェイクスピア」(1998年アメリカ)のヒロイン。

モデル出身のグウィネス・パルトロー氏が、小さい頭にブロンドのショートヘア、鼻の下にちょびヒゲをつけて性を偽り、「シェイクスピア劇のオーディションに合格する美青年役」と「貴族の娘の役」の2役で、アカデミー主演女優賞を獲得。ライトなコメディだが、作品賞をはじめ、衣装、メイクアップふくめて13部門も受賞した。

ここでは、美貌の持ち主である貴族の娘に男性が恋をする。その娘と男装の役者が同一人物だと知った男性が、普通の男性でなくシェイクスピアとあってか、芸術家の女性に対する偏見が限りなく少ないことを思わせた。アメリカ人に受けたのは、このあたりの理由も含まれるだろう。また演技派とはいえないグウィネス氏が賞を獲得したのは、グラマラス

な女優にはない魅力で男装ファッションに挑戦したところが、多大に評価されたと言えそうだ。

ただ、マニッシュの元祖といえば、「モロッコ」(1930年アメリカ)のディートリッヒ氏や「クリスチナ女王」(1933年アメリカ)のガルボ氏が先輩で、なんとも迫力と気合いにおいては敵わない。

ディートリッヒ氏は自ら男装ファッションを提案し、女優・ガルボ氏自身はあまり着飾らないタイプで、独身のまま引退。エリザベス・テラーのような宝石つきの男性遍歴に、いささか批判的だったと伝えられている。筋入りの男装女優なのだ。役柄上、着せられるタイプではなく、自分の意志でアピールする姿勢だったのが、ファッションにも顕著に表れる。

ただ、フェミニズム活動も進展した現代のヒロイン像はさらに逆転して、ドレッシーなファッションスタイルを誇示しながら、男性のヒロイズムを併せ持つ内面のマニッシュ性が可能になってきたと、私は分析している。

海外の女性がセクシードレスを着ても、安っぽいお色気に訴える日本の戦略ではなくきりりとカッコいいのは、そうした内面からもくるのだと思う。



Information

NAHOK、防水+湿度調整のカジュアルバッグも人気!

夏にふさわしいミント特集。もちろん突然の雨にも安心のドイツ製完全防水記事となっています。今回紹介する中でもミント色のリュック「Hummingbird」は特に人気の商品です。



■フルトリュックII「Hummingbird」ミント/チョコ(写真奥)
希望小売価格: ¥36,720

■フルトリュックケースガード「Amadeus/wf」(H管)ミント/白(写真中)
希望小売価格 ¥22,680

■ピッコロケースガード「Mancini/wf」ミント/チョコ(写真前)
希望小売価格 ¥22,680



■ポシェット「Bandits/wf」ミント/チョコ
希望小売価格 ¥12,960

■フルトリュックII「Hummingbird」(写真奥)
(オーボエ・クラリネット対応)ブロンズグリーン/黒
希望小売価格: ¥12,960



www.nahok.com

NAHOK は、ドイツ製完全防水生地、止水ファスナーを加え、さらに欧州輸入の耐衝撃、温度 & 湿度調整機能素材を挿入した MADE IN JAPAN の逸品です。



木村奈保子

映画評論家、作家、演出家、NAHOK デザイナー。京都外大卒業。CBC局アナから映画評論家へ転身。

ゴールデンタイムの映画解説を17年間勤め、同時に演出家としてテレビ番組やファッションビデオの制作や、著作、講演なども多数手がける。昨今は、映画音楽の演奏活動やプロデュース、ダンス舞台の演出ほか、画期的な楽器ケースを研究開発、デザイン。文化的かつ、アントレプレナー(企業家)の資質で活躍する。

www.kimuranahoko.com/